九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# Decision-making dilemmas of paediatricians: a qualitative study in Japan

笹月, 桃子

https://hdl.handle.net/2324/4060060

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：© Author(s) (or their employer(s)) 2019. Re-use permitted under CC BY-NC. No commercial re-use. See rights and permissions. Published by BMJ.

氏　　名：笹月桃子

論 文 名：Decision-making dilemmas of paediatricians: a qualitative study in Japan
（意思決定に際する小児科医の葛藤：日本における質的研究）

区　　分：甲

## 論　文　内　容　の　要　旨

背景：重篤な疾患や障害を抱える子どもの命に関わる治療方針を決定することは容易ではない。その主な要因として、その子どもが抱える病態の希少性・多様性・個別性の高さ、医療技術の発展に伴う選択肢の増加、そして子どもの意思決定能力の未熟性が挙げられる。個別事例における実践的な倫理基準が必ずしも示されていない現場においては、必然的に、小児科医は個人の価値観や経験をもとに判断せざるを得ない。本研究の目的は、方針決定に際し小児科医がどのような思考過程と心理社会的体験を辿っているかを明らかにすることである。
方法：小児科専門医に対し個別の半構造化インタビューを行い、得られたデータを Grounded Theory Approach に則り、網羅的に質的に分析した。理論的サンプリングと分析を繰り返し、理論的飽和を目指した。その結果をもとに、Content Analysis によりデータを再分析した。インタビューを追加してその結果の妥当性を確認した。
結果：理論的サンプリングを通じ、１５名の参加者のデータを分析し、理論的飽和を確認した。Grounded Theory Approach の結果、参加者は命に関わる治療方針の決定に際し、専門分野に関わらず互いに共通する、多様な葛藤を抱えていることが明らかになった。これらの「葛藤」に焦点を当て、全データについて Content Analysis を行い、葛藤は５つの因子（小児科医の信念・子どもの最善の利益を求める・両親との対峙・医学的妥当性を求める・社会および環境因子）とそれぞれの因子同士の拮抗によって生じることが判明した。さらに、参加者の思考過程を探査し、この５つの因子は３つの視座（決定者・決定の過程・決定の結果）に分けられ、規範倫理学の３大理論（徳倫理・義務論・帰結主義）と相関していることがわかり、現場において倫理的葛藤を抱える現状と矛盾しないと考えられた。（図１）
考察：方針決定の主体であり、かつ葛藤を生む因子としての「小児科医の信念」にはカントが提唱する人間の行動動機となる３つの理性が統合されており、５つの因子の上位概念と捉えられた。「小児科医の信念」を支える医学教育、「社会および環境因子」における社会のコンセンサス形成、「子どもの最善の利益」を見出す社会での議論促進など、それぞれの因子を通じて、子どもにより質の高い医療を届けるために、現場および社会において求められている課題と支援の在り方が示唆された。国民性・医療文化による影響について、今後検証が求められている。
結論：子どものいのちに関わる方針決定に至る小児科医の思考過程と葛藤を構造化・視覚化した。意思決定現場への還元性と実践的・包括的な支援の在り方が示唆された。

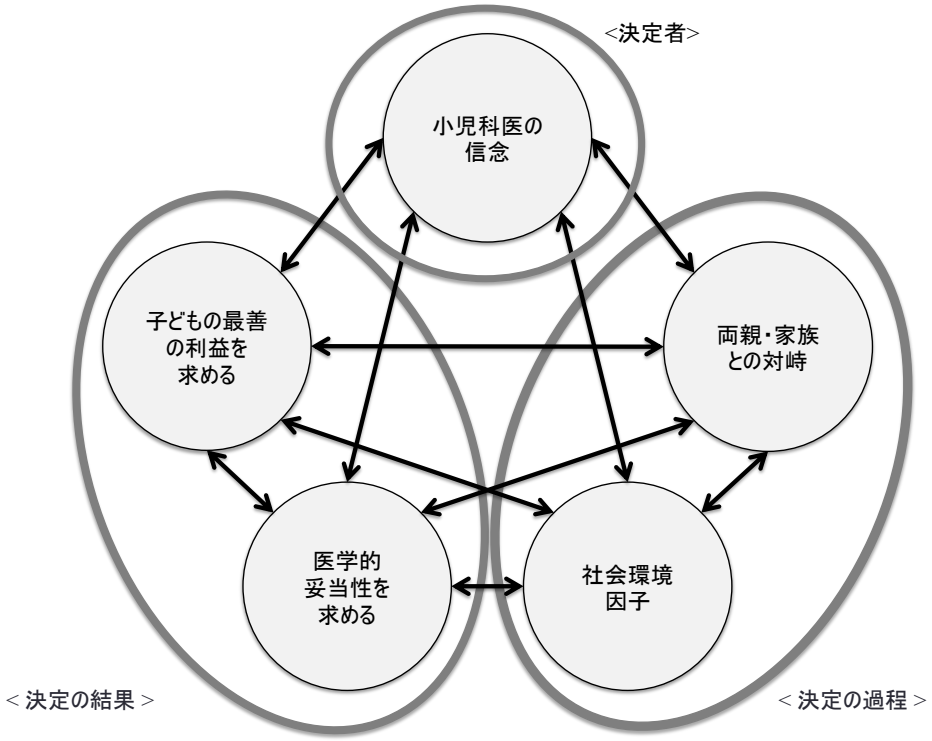


図１：小児科医の葛藤を構成する 5 つの因子と 3 つの視座
薄い灰色の 5 つの丸がメインカテゴリー（I～V）にあたる。矢印はカテゴリー（VI～X）に相当し、5 つの因子間の拮抗関係を示す。濃い灰色の楕円、＜決定者＞＜決定の過程＞＜決定の結果＞は、5 つの因子における 3 つの視座を示す。